

Language Artist and Self-Growth:
James Joyce's A Portrait of the Artist as a Young Man

言語の芸術家と自己の成長
—ジェイムズ・ジョイスの『若い芸術家の肖像』

秋山 義典

言語の芸術家と自己の成長

—ジェイムズ・ジョイスの『若い芸術家の肖像』

外国語共通教育センター 秋山 義典

1. 教養小説とモダニズム

ジェイムズ・ジョイスの『若い芸術家の肖像』(1916)は、この小説は5章から構成されている。その章の中は数字のない節に分けられて、細分類がつけられている。この最初の章では、スティーヴン・ディーダラスの幼年時代から10歳程度にいたる人生の出来事のひとつひとつが語られる。伝記作家リチャード・エレマンはこの作品を自伝的小説と呼び、いくつかの点で作家ジョイス自身の実人生と重なりあうと指摘する。一方この小説は、ジョイスの実人生が物語に必ずしも影響しているわけではなく、むしろこの主人公はジョイスが描く虚構の芸術家であり、若い青年の肖像画の理想像を描いているという指摘もある。読者は、スティーヴン・ディーダラスの特別な経験を通じてひとりの青年がどのように世界を認識しているのかを読み解いていく。そのタイトルから若い主人公が芸術家になろうとする物語の主人公スティーヴン・ディーダラスが、芸術家をめざす時間の経過のなかで、祖国アイルランドをどのように認識しているのかを観察しつつ、言語や文体に注目して、その言説がどのように主人公に理解されているのか(誤解されているのか)を分析してみようと思う。その分析の前に、まずは幼年期から青年期にむかう具体的な成長を追跡して見よう。

若い主人公が成熟して大人になる小説は、「教養小説」とよばれるが、その「教養小説」の言説をめぐり現在多くの議論が行われている。主人公は必ずしも大人に成長できるわけではない。感受性の鋭い子供が父親に息苦しさを感じながら成長する。学校も友人も彼にとっては自由のない場でもあり、

不自由な人生を送る。あるいは、主人公が成熟に達するまえにその成長がある時点でストップしたままで、主人公を救済できないままで結末を迎える場合もみられる。フランコ・モレッティは、「教養小説」とは若い個人の自伝が歴史を理解し評価するための最も意味のある視点であるという見解に常に従ってきたという。^{*1}あるいは、19世紀のヨーロッパの教養小説の特徴とは、ジェド・エスティが言うように、国家の歴史的な時間の内部枠組み内で成長し、その国家との統一のなかで自己の理想に向かう主人公のすがたが思いだされる。たとえば、ジョージ・エリオット『フロス河の水車場』（1860）の主人公トムとマギーは、聖オッグの町の中に時代も空間も限られた単数枠の中でマギーはひとりの女性に成長していった。因習的な社会制度の枠のなかで兄と妹の成長が展開しているということができる。^{*2}ミハエル・バフチンによれば、「教養小説」の主人公とは、この世界とともに出現し、世界自体の歴史的な出現を反映しているという。この主人公は、もはやひとつの時代のなかに存在するのではなく、ひとつの時代から次の時代へつながる時間の移行期のなかに言語、社会の多様性、矛盾のなかで試練を受けて存在すると指摘している。この特徴は、19世紀から次の世紀に移行する時期としてモダニズムにおける「教養小説」の傾向について、その時間意識の変化という点で納得できる説であろう。^{*3}そうした視点から、マーク・レッドフィールドは、「教養小説」が異なるふたつの動きを秘めている点、そのふたつの動きがパラドックス的な側面を示す点を強調する。ひとつはより全世界的な方向へ向かう衝動とある一定の時間や世界に限定された世界のなかでの自己形成に向かう方向の相反するふたつの動きがあると指摘する。このふたつの方向は教養小説に関するパラドックス的な意味を暗示していると指摘する。^{*4}『若い芸術家の肖像』はこの相反する動きを主人公の精神に見出すことはできると思われる。では、ジェイムズ・ジョイスの『若い芸術家の肖像』（1915）をモダニズムの教養小説としてみたとき、20世紀の教養小説としての特徴とはどこにあるのだろうか。

2. 若い主人公の精神形成と言語形成

スティーヴン・ディーダラスが物語のなかで年を重ねるにつれて、少しずつ、彼が使うことばの傾向に変化の兆しを感じられる。語り手は成長とともにだんだんと語彙を複雑に変えていく。具体的には意識の流れ、時間軸の複雑さ、文章構造や語彙の拡大などに着目することで、小説のなかでスティーヴンの成長段階がどのように映し出されるのであろうか。たとえば、少年期には主人公のスティーヴンは家族との会話のなかで短い文章で正確に内容を伝えているようにみえる。さらにその言語が家族を超えた別の制度とのかかわりの中でどういう問題が示されるのかという点にも言及して見たい。彼は芸術家になろうと決心するが、絵画や音楽、彫刻の作品を創造するのではない。むしろ言語の芸術作品を作り上げようとするのである。やはりスティーヴンは言葉の芸術家にふさわしい。

—A day of dappled seaborne clouds.

The phrase and the day and the scene harmonised in a chord. Words. Was it their colours? He allowed them to glow and fade, hue after hue: sunrise gold, the russet and green of apple orchards, azure of waves, the greyfringed fleece of clouds. (203).

スティーヴンは一句思い浮かべる。「海より生まれし斑なる雲の一日 (A day of dappled seaborne clouds)」ということばをつぶやく。この句とこの日とこの光景が一つの和音のなかで調和する。言葉。それは言葉の色合いなのか。彼はその言葉の色合いが次々と光ったり消えたり、日の出の黄金、リンゴ園の赤と緑、波の紺碧、灰色に縁どられた雲、その色合いの変化に任せた。スティーヴンは言葉が空の色のようにその色彩を変化させていることを音や色になぞらえて言葉を巧みに操りながら、言語を豊かに表現しようとしている。このように彼は言葉の芸術家にふさわしい。

この小説の第1章は、よく知られているように、この自伝的な物語であり

ながら、その冒頭は子どものお休みまでのベットタイムストーリーを聞くような印象を伝える。

Once upon a time and a very good time it was there was a moocow coming down along the road and this moocow that was coming down along the road met a nicens little boy named baby tuckoo.... His father told him that story: his father looked at him through a glass: he had a hairy face.

He was baby tuckoo. The moocow came down the road where Betty Byrne lived: she sold lemon platt.

O, the wild rose blossoms

On the little green place.

He sang that song. That was his song.

O, the green wothe botheth.

When you wet the bed, first it is warm then it gets cold. His mother put on the oilsheet. That had the queer smell.

His mother had a nicer smell than his father. She played on the piano the sailor's hornpipe for him to dance. He danced: (3)

最初はおとぎ話を読み始めたかのような世界が広がる（Once upon a time and a very good time it was there was a moocow coming down along the road）。スティーヴンの幼年時代に表現される言語の単純さが、幼い主人公の精神を素直に映し出す鏡のような役割を暗示しているのではないかと思われる場面である。父親と母親のにおいの記憶（His mother had a nicer smell than his father）とともに危害を加えられることなく、安全に守られて生きている様子が伝わってくる。この小説は子どもに向けた書かれた古典的なむかし話なのだろうか。だれがこの物語を語っているのか、コリン・マッケイブは、ジョイスのテキストは言語が経験と符合するような支配的なポジションも主体に許さないという。ジョイスのテキストを読む側は通常的位置から場所をずらされて、読者とその言説の関係に変更を強制し、19世紀のテキストの現実を普通に読解することとは次元が異なる点を強調し、ジョイスのテ

キストの特殊性について説明をくわえている。^{*5} ヒュー・ケナーによれば、このおとぎ話の話者は、スティーヴンでもなければ、彼の父親でもなく、伝統的な語り手でもない指摘している。^{*6}

誰が語り手なのかは、はっきりしないものの、同時に、この冒頭の場面でつかわれている言葉はどうであろうか。それは、人間の五感に訴える言葉が特徴的である。このむかし話の言説には人間の感覚に関する言葉が使われている。その言葉が包括的な経験を子どもの中に残る記憶の中にも集約している。メガネから覗く父親 (his father looked at him through a glass) が「視覚」であり、レモンの飴 (lemon platt) を口の中で味わう「味覚」を暗示しており、ピアノの演奏で歌をうたう (聴覚) は耳に影響をもたらし、おねしょの暖かさを感じる感覚 (it is warm then it gets cold) の「感触」とそこに拡がる奇妙なおい (the queer smell) の感じ方 (嗅覚) が暗示されている。人間の五感が混ざりあってひとりの人物にすべてを強く訴えかけてくる様子が言語によって音楽を聴くように巧妙に描き出されている。^{*7} この幼い子どもは、将来、芸術を目指そうする若い主人公に成長し、大人になり、世界を見る鋭い洞察力を発揮する芸術家になるだろうと示していると見る事が可能かもしれない。

彼を取り巻く世界のなかで、この青年がどのような信念をもち、どのように家族と接して、アイルランドという国をどう考えるのか、スティーヴン・ディーダラスの思考過程を追跡することになる。結果的に、芸術家をめざすこの青年は社会に定められた規則と上手に調和することができず、自身苦しみを感じる。そこからしだいに彼は祖国のアイルランドと徐々に距離を置くようになる。こうした距離のおき方をみた周りの人々から自己中心的な人物と誤解も生むことになった。結局、彼自身が理解されずに、孤立感をさいなまれることになる。スティーヴン・ディーダラスはまた同時に、極めて知性的な青年であり、感受性豊かで、言葉も饒舌な人物である。では、自己に自信を持っているのかというと、自己に対する不信感、自己に対する不安感から逃れることができない。徐々にこの主人公は社会的な疎外感を感じるようになる。スティーヴン・ディーダラスの幼年期は両親とともにときを送る

が、6歳でジェズイット派の寄宿学校、クロンゴウズに入学させられるが、その学校で同級生からいじめをうけて、街中のジェズイット派の学校に転校する。そこでベルヴェディアの自由な雰囲気にもふれる。

この物語の次の焦点はスティーヴン・ディーダラスと彼が生きる社会との衝突である。彼は新しい学校から宗教や自己同一性の危機に至る現実的な問題に立ち向かう。教養小説では、よく指摘されるように、主人公が社会から切り離されてしまう状況に出会う。成長するなかで自己の内面に閉じ込められた若い主人公の姿は象徴的である。自己形成が社会の言説空間から離脱した状況で、スティーヴンがある問題に直面する。

3. 「キスをする」の言説と社会制度

入学式では、スティーヴンはいまにも泣きそうな「きれいなおかあさん」から「キス」をしてもらった。この場面では言葉によって形成される「キス」の言説が主体に影響を及ぼす。いわば、社会化をうながす言説の役割が暗示されているとも理解できるかもしれない。入学式の日にお城の玄関ホールで母親が彼にさよならをいうときにヴェールをあげてくれて、「キス」してくれた。

The first day in the hall of the castle when she had said goodbye she had put up her veil double to her nose to kiss him: and her nose and eyes were red (13).

彼に「キスする」母親の目と鼻が赤くなっていた。家族の中で「キスする」という言説は母親との理想的な意思疎通が象徴的に行われていることが理解できる。ところが、その「キスする」の言説が、異なるコンテキストに置き変わると、スティーヴンの「キスする」の意味が、少しずつズレてくるのが見えてくる。^{*8} クロンゴウズの学校に入ると、級友のウェルズがスティーヴンに寝る前におかあさんにキスするのか聞く (Tell us, Dedalus, do you kiss your mother before you go to bed?) (13)。彼は「するよ (I do)」

答える。今度はウェルズが生徒のみんなの前でスティーヴンが寝る前におかあさんにキスをすることを言いふらし始める。スティーヴンは顔を赤くしてすかさず「しないよ (I do not)」と逆の答えをして前言を否定してみせる。するとスティーヴンはみんなから大笑いされてしまう (They all laughed again. Stephen tried to laugh with them)。スティーヴンも無理してみんなといっしょに笑おうとするのだが、このウェルズが仕掛けた質問のトリックに彼の頭がこんがらがってしまう (He felt his whole body hot and confused in a moment)。彼の混乱ぶりを示す気持ちの動揺を感じさせる点は、何かといえば、ウェルズの質問には正しい答えがあるのではないかと考えてしまう (He still tried to think what was the right answer. Was it right to kiss his mother or wrong to kiss his mother? What did that mean, to kiss?)。言説は主体に抑圧を与える制度でもある。まさにセクシュアリティの特性をさぐるような言説がスティーヴンを葛藤に追い込んでいく。スティーヴンの所属する男子校でのふるまい方の社会的な規範を理解していないことを自分の社会集団からからかわれてしまうのである。言語が形成する言説が作られている。男子校という制度が一種の権威になり、あるいは権力の特徴が、若い主人公を抑圧する。スティーヴンの言説意識の限界が暴露されている。

He still tried to think what was the right answer. Was it right to kiss his mother or wrong to kiss his mother? What did that mean, to kiss? You put your face up like that to say goodnight and then his mother put her face down. That was to kiss. His mother put her lips on his cheek; her lips were soft and they wetted his cheek; and they made a tiny little noise: kiss. Why did people do that with their two faces (14)?

スティーヴンはその質問に正しい答えが何なのか、まじめに考えようと頑張る。「キス」とは常におかあさんがほっぺたにくちびるをつけてくれるもので、くちびるはやわらかく、かすかにやさしい音をたてるものがキスであるとスティーヴンは思い込んでいる。彼は、キスとは母親との関係のなかで形成されるとしか思えないのである。彼がキスの意味作用であるセクシュアリティの言説の外側に位置していることを表している。ミシェル・フーコー

は社会の抑圧が言説にもとづいて運用されて、その言説が人々の権力を規制する社会制度によって作り上げられている点を強調しているが、フーコーによれば、権力が抑圧的であると同時にそれは主体に活力を与えると指摘する。^{*9}つまり、主体は制度的な権力と対決することで抑圧による知の磁場が形成されて、その磁場から活力を与えられるといえる。学校という社会制度が男子校の言説を作り上げて、スティーヴンに対する権威となり、その主体に抑圧の力学が機能する。しかし、主体は権力に抑圧されるだけでなく、その抑圧によって葛藤の磁場が生まれて、そこから活力を蓄えることが可能になり、抑圧されない主体よりも権力間の緊張関係が主人公に多くのエネルギーを与えることができるようになる。結果として、主人公はこうした制度的な力と対決してはじめて、その場では打ち負かされた結果に終わったとしても、結局その磁場からうまれた活力を利用することが期待される。そこに自己形成することが可能になるのである。

この後、スティーヴンにとって「キス」の言説は一種の強迫観念になる。第2章第3節に登場するスティーヴンのお気に入りの女の子との「キス」の妄想に取りつかれる。

その女の子が自分に抱きしめられたいとスティーヴンは思う。最終の馬車に乗り込んだ彼女とキスすることができるはずだろうと思悩む。

She too wants me to catch hold of her, he thought. That's why she came with me to the tram. I could easily catch hold of her when she comes up to my step: nobody is looking. I could hold her and kiss her.

But he did neither: and, when he was sitting alone in the deserted tram, he tore his ticket into shreds and stared gloomily at the corrugated footboard (93).

だれもない馬車の中で、スティーヴンは彼女を抱きしめてキスできる妄想にふける。だれもみていない。しかし、彼は抱きしめることも、キスする

こともその両方とも実行できずにおわる。結局だれもいない馬車に一人残されて、切符をバリバリにひきちぎっていた。セクシュアリティを探求する主体は知/権力の磁場(馬車)でセクシュアリティと結びついた自己形成を育むことが可能になり、たとえそれは成功しなくても、主人公に多くのことを教えている。つまり、こうした苦い経験のあとにやってくるエネルギーを得ることができたという感覚が大きな意味を持つのである。それは、フーコーの権力/知の力学からも例証されるように、成長という力を与えていると考察することができる。スティーヴンはこの後家族との距離が変わって、父親や弟、母親たちの家族関係に従来通りの考え方を持てなくなる。その結果、イノセントな少女に対して自分の理想像を勝手に作り上げている。文学作品で読んだような理想の女性像を現実の中に作り上げてしまう。

しかしながら、この若い主人公は家族への絶望感に苦しむことになるが、同時に「キスする」の言説を彼は把握できるようになる。第2章第5節では、スティーヴンの悩ませた「キス」の言説は見事な成果を見せることができる。感受性豊かな詩人のような感性と思春期に相応しい性的な欲求が混ざりあって、名前も知らない女性と「キスする」ことになる。後半の部分は、彼のセクシュアリティとの関係で売春婦とのいかがわしい行為や薄暗い売春街にたどり着くなどと、ネガティブな説明も聞かれるが、この場面はむしろその反対に、彼の芸術家的なファンタジーを言語化するクリエイティブな機会であるように思われる。「キスする」の言説が、複数の可能性に開かれた、ロマンティックな描写で若い主人公の詩的な想像力の広がりを感じさせる。その女性はあるスティーヴンに「キスする」ことを要求するわけである。

Give me a kiss, she said.

His lips would not bend to kiss her. He wanted to be held firmly in her arms, to be caressed slowly, slowly, slowly. In her arms he felt that he had suddenly become strong and fearless and sure of himself. But his lips would not bend to kiss her.

With a sudden movement she bowed his head and joined her lips to his and he read the meaning of her movements in her frank uplifted eyes. It was too much for him. He closed his eyes, surrendering himself to her, body and mind, conscious of nothing in the world but the dark pressure of her softly parting lips. They pressed upon his brain as upon his lips as though they were the vehicle of a vague speech; and between them he felt an unknown and timid pressure, darker than the swoon of sin, softer than sound or odour (205).

その女性は「キスして」という。「キスする」という言説が一瞬スティーヴの頭の中でパニック状態になり、思考が混乱している。だから、彼はそのくちびるはそうはしなかった。その女性にしっかり抱きしめられたかった。抱きしめられると自分が強くなって、恐れることがなくなり、自信が湧いてくるという。フーコーは個人が様々な社会制度の権力（力）の関係のなかに生きていることを主張するが、権力はいたるところに発生するという説を思い出すと、その社会制度とは家族、学校、教会、セクシュアリティなどを指す。フーコーによれば、その支配—抑圧の構造は個人を外側から抑圧するだけでなく、その権力の磁場では、スティーヴンは「キス」の言説を強制された立場であった。それは隷属される苦しい立場でもあった。しかし、同時にその苦しさから得ることができる喜びも否定されるわけでない。彼が押し付けられた「キスする」ことの言説は、スティーヴンを抑圧しつづけた。「正しい答え」を探し出す苦しさで葛藤を続けていた。しかし、個人の主体はその権威に打ち負かされることで終わるのではないことが確認できる。自分の主体性を発揮するために「活力」が付与されている。その様子を表現しているのが、「自分がとつぜん強くなり、恐れしらずで、自信がついてくる (he had suddenly become strong and fearless and sure of himself)」気がするというスティーヴンの台詞であり、それが新たな決意を暗示している。

4. 自己成長と言語への意識

主体は必然的に言葉によって作られるといわれる。主体とはなんらかの形で様々な権威に隷属することでもある。その形とは、歴史、セクシュアリティ、マイノリティー、社会と様々な制度でもある。そのひとつが言語である。したがって主体は自らの意思で制約なく行動できる自由を所有していると思われているが、実はそうではなくて、主体は、言語によって従属させられている、外部の制度によって支配される不自由な存在である。

第2章では、スティーヴンがベルヴェディア・カレッジの一年目には自分の家庭のことや将来についての不安が心の中に沸き起こり、自分に対する自信が失われているように思えたが、英語のテイト先生がスティーヴンの論文について論じる場面がある。“though in deference to his reputation for essay writing (77)” とスティーヴンは文章がうまいといわれる。彼は文章が上手で小論文を評価されている。ことばへの情熱やことばへの意識が高い。スティーヴンは自分の書いた小論文の出来に自信を持っていた。なぜならば、小論文の試験ではずっといちばんを取り続けたのであった。

The essay was for him the chief labour of his week and every Tuesday, as he marched from home to the school, he read his fate in the incidents of the way, pitting himself against some figure ahead of him and quickening his pace to outstrip it before a certain goal was reached or planting his steps scrupulously in the spaces of the patchwork of the footpath and telling himself that he would be first and not first in the weekly essay (83).

スティーヴンは一週間のうちに小論文を書くことにいちばんに力を注いでいた。だから、その文章の出来具合に神経を注いでいたのであった。彼は家を出て、学校につくまでちょっとした出来事から運勢をみたり、自分の前を歩いているひとを追い抜けると運勢がいいと思ったり、歩道の石畳に歩数をあわせて歩きながら、自分のことばについての意識を高めている様子が見てとれる。今週の小論文の完成が一番になれば、と自分で自分に言い聞かせた

りしている。彼の言語への鋭い意識が見られる場面である。火曜日は彼の一番を続けた記録が無残に破られた。自分の作文が一番にはならなかったのである。

On a certain Tuesday the course of his triumphs was rudely broken. Mr Tate, the English master, pointed his finger at him and said bluntly:

---This fellow has heresy in his essay (83).

テイト先生はスティーヴンの作文には「異端 (heresy)」の思考があると指摘された後、テイト先生はどこが異端の思考なのかを正確に語彙を直してスティーヴンに教える。

Here. It's about the Creator and the soul. Rrm...rrm... rrm...Ah! *without a possibility of ever approaching nearer*, That's heresy.

Stephen murmured:

---I mean *without a possibility of ever reaching* (83).

スティーヴンの文章のどの部分が「異端」であるかは、人間の魂が神のような造物主に近づくことができることを彼が認めようとしなかったことに原因があるという。テイト先生はイギリス英語の達人 (the English master) でもある。イギリス英語という権威がスティーヴンを抑圧している。英語という制度的な権力が特に抑圧の場でもあり、彼に社会化をうながす制度的言説の役割をはたしているのがわかる。共同社会の中のスティーヴンは、「決して近づく可能性なしに (without a possibility of ever approaching nearer)」という意味で使ったのでなく、「決してたどり着く可能性なしに (without a possibility of ever reaching)」と書くつもりでしたと説明することで先生を納得させようとする。注目すべきは、正確な表現を意識した短文を使い、その共同社会の言語に近づくことができる。それが主人公の成長を暗示しているということができるであろう。徐々に、言語の量を増やすことで、その精神

の複雑さが見られるようになる。言語獲得の展開は、人間の精神の成長を間接的に示す指針でもある。教養小説に登場する幼い主人公とは、そのころは、孤独であり、感受性が強く、自己とはなにかという自己同一性を探求する鋭い知性の持ち主であるといわれるが、こうした言語能力をもっているがゆえに、言葉の意味づけ、言語の明晰さを自己に反映させながら、この世界とはなにかを考察して、この世界の謎やその意味をさらに深く解き明かす能力を身に着けることができる。加えて、若い主人公はその言語を獲得して、その共同社会の一員であることを意識するようになる。人間の成熟過程のなかでその社会の中の言語獲得が自己成長を測定する標識の役割を果たす。

さて作文指導の場面からも、想像されるように、アイルランドでの国語教育はイギリスによって支配されていたことも見てとれる。スティーヴンの友達で一番えらい作家は誰かという話になると、テニソン (Tennyson) やバイロン (Byron) の名前があげられる。ヘロンからはバイロンは「へぼ詩人」であることを認めさせようとその日の学校の帰り道で「この異端者を捕まえろ」とヘロンから脅されて、スティーヴンはステッキで足を撃たれたのである。テニソンやバイロンが作家といえるのか確かではないが、英国の言語支配がアイルランドに及んでいるのは確実であり、アイルランドは英国の最初の植民地であり、英国の文化的な支配が及んでいる点も改めて確認することができる。教師がスティーヴンの作文に「異端の思考」があると言いがかりをつけるあたりも、支配—従属を連想させる当時の英国の文化的な支配の一端を垣間見ることが可能であろう。

When the gymnasium had been opened he had heard another voice urging him to be strong and manly and healthy and when the movement towards national revival had begun to be felt in the college yet another voice had bidden him be true to his country and help to raise up her fallen language and tradition(88).

アイルランドの学校教育がイギリス英語に忠実に組織化されているなかで、アイルランド人のスティーヴンが同時にアイルランド文化への同調も意

識しなければならない状況も見られる。体育館が出来たときには、もっと男らしく健康になれと呼び掛けられるのと同じように、アイルランド復興運動 (the movement towards national revival) の動きが大学の中に感じ取られたときに、母国の滅亡した言語 (her fallen language) と伝統を高揚するように命じる声やアイルランドに忠実であるように命令する (another voice had bidden him be true to his country) 声も、スティーヴンの脳裏をよぎる。実際、この時期にアイルランド独立を目指す「アイルランド義勇軍」が1913年に組織された。大学の中でもアイルランド語、ゲール語を復活させるようとする運動が展開した。このような文化の混交がスティーヴンの人格形成に複雑な影響を与えている。ミハイル・バフチンは、「ヨーロッパ小説における二つの文体の流れ」のなかで、小説の中にはその時代のあらゆる社会・イデオロギーがその時代の諸言語によって提示されると指摘している。その時代の複数の社会、様々な声、諸言語を小説は十分に描きださないといけないという。こうした多言語の中で主人公は試練を受けて、淘汰されて、成長することになる。このような言語多様性を認識することが教養小説の主人公に成長を促すことにつながる。言語と教養小説の主体との関係に新しい意義が強調される。^{*10}

主人公のアイデンティティを形成するときに本人には回避できない緊張と対立が意味を持つのである。このようにアイルランドと英国が相反する言語を生み出し、矛盾した言説が衝突し合う。その世界との試練に満ちた出会いから浮上してくる新たな自己の可能性というものが想像されるが、それがその後を生きる、成長する新しいスティーヴンの姿が期待される。

5. 言語意識とアイルランド国家

言語とアイルランドとの関係も無関係ではない。「アイルランドに住む哀れなイングランド人 (a poor Englishman in Ireland)」(204) である学監との対話でスティーヴンはアイルランド語が英国人 (the English) に属することを考えるようになった。すると、彼のところは、「この男の国語のかけ (the shadow of his language)」に覆われているのを強く意識するようになる。幼

年期には見られなかったが、言語と自分のアイデンティティを意識するようになる。それは彼の成長を示す大切な部分である。スティーヴンのなかでは言語と国家が密接につながりをもって語られるようになる。

—The language in which we are speaking is his before it is mine. How different are the words home, Christ, ale, master, on his lips and on mine! I cannot speak or write these words without unrest of spirit. His language, so familiar and so foreign, will always be for me an acquired speech. I have not made or accepted its words. My voice holds them at bay. My soul frets in the shadow of his language (205).

スティーヴンは、今は話していることばが自分のものである前に、この男のものである。この男の口から出ることばは、自分の口から出ることばとは何かがちがうと思う。こうした言葉を口にしたり、書いたりするときところに不安がよぎる。この男のことばは、自分になじみ深いものなのに、よそよそしいものでもあり (His language, so familiar and so foreign)、いつまでも習い終えたばかりのことばにとどまり、自分でつくったわけでもなく、自分として受け入れたわけでもない。だから、自分の声はこわばってしまう。その精神はこの男の国語のかげに覆われて (in the shadow of his language) あれこれ考えて思い悩んでしまう (My soul frets) とスティーヴンは告白するのである。つまり、こうした自己の意識の変化が、アイルランドへの孤立感をさらに強化することにつながる。小説の前半スティーヴンはアイルランドという国家と言語を強く意識することによって祖国アイルランドに少なからず誇りを感じていっていたが、彼は徐々にその気持ちを変化させている。同時に、また別の葛藤がうまれつつある。

それは、次にみられるスティーヴンの精神を無意識に反映するかのような言語の転換がおこなわれるのがわかる。最初に my という所有格を使って「ぼくらの祖先」といったのだが、その祖先を「They」でおきかえていて、「my」という自分の祖先という意味を消しているようにみえる。

—My ancestors threw off their language and took another, Stephen said. They allowed a handful of foreigners to subject them. Do you fancy I am going to pay in my own life and person debts they made? What for? (220)

友人のディヴィン^{*11}との対話で、スティーヴンはこころのなかではアイルランド人であるわけだ、自尊心が強すぎると指摘されて、反論しようとする。「ぼくの祖先」であるアイルランド民族は自分たちの国語を捨てて別の国語を身につけたのだ。「ぼくの祖先」というべきところを「彼ら(My ancestors)」はひと握りの外国人(イギリス)に服従してしまう。ふたたび、スティーヴンはぼくが命と肉体をかけて、彼らのつくった借財を清算するつもりだときみは思っているのか、いったいなんのためにと主張する。スティーヴンにはアイルランドの歴史は裏切りの歴史なのであると考えるようになる。ここでは混乱と動乱のアイルランドに対してスティーヴンが距離をおこうとしているのがみられるし、言語と国家の関係が重要な意味を示しているのではないと思われる場面であるといえる。言語の使い方の変化をみることで、やがて、最後はアイルランドを捨てていくスティーヴンの決意を予兆しているように考えられる。イギリスという国家がアイルランド人のスティーヴンを抑圧する。

6. 一族との会話を聞き漏らさないスティーヴン

第1章では、スティーヴンが家に帰る途中、チャールズ伯父さんと礼拝堂に立ち寄ると、彼が目にするのが、おじさんの信心深いふるまいにさすがだと感心する。スティーヴンも真似をしておじさんの横にひざまずく。しかし、スティーヴンにはなぜおじさんがこれほど真剣に祈りをささげているのかわからない。週末、スティーヴンは父と伯父のチャールズといっしょに10数マイルの散歩をした。その帰りに道端のパブに入った。そこで父親や伯父が家族の昔話やアイルランドの政治の議論を耳にする。

On Sundays Stephen with his father and his granduncle took their constitutional. The old man was a nimble walker in spite of his corns

and often ten or twelve miles of the road were covered. . . . Trudging along the road or standing in some grimy wayside publichouse his elders spoke constantly of the subjects nearer their hearts, of Irish politics, of Munter and of the legends of their own family, to all of which Stephen lent an avid ear. Words which he did not understand he said over and over to himself till he had learned them by heart: and through them he had glimpses of the real world about him. The hour when he too would take part in the life of that world seemed drawing near and in secret he began to make ready for the great part which he felt awaited him, the nature of which he only dimly apprehended. (64)

幼いスティーヴンがどんなことに神経を注ぐのか。それは彼が父親や伯父がマンスター地方のはなしや一族のはなしなどそうした大人たちの会話を一つ残らず聞き漏らさないように耳を傾けてきこうとしていることである (Words which he did not understand he said over and over to himself till he had learned them by heart)。この時間とはわからない単語は一人で何回もくり返し覚えようとするときであり、彼はこのようなむずかしい言葉をとおして自分をとりかこむ実社会をのぞき見ることができる (through them he had glimpses of the real world about him) 貴重な時間になっている。スティーヴンはやがて自分もその世界に参加する時期がそろそろ近づいているような気がしている。その役割がなにかはぼんやりしか理解していなかったものの、自分を待ち受けている大きな役割にそなえる自己形成の準備を始めようとしている (in secret he began to make ready for the great part which he felt awaited him)。そういう自分が成長できると感じられる意味のある時間といっていい。この場面ではスティーヴンは、何を話しているのか、曖昧ではあるが、二人の大人の会話の世界で展開する言語の展開に興味を示している。言語を獲得しながら、自分の世界が拡大することにスティーヴンの若い意識が集中することで、同時にそれは言語活動への参与にむかっているのである。その世界にはまだ自分は参入していないが、言葉の意味を知ること、こっそりとその内部に入って大きな役割を果たそうという成長への意欲を示唆している。こういうスティーヴンの考えには、彼の成長のしるしが反

映されているように思われる。スティーヴンも少しずつではあるが年齢を重ねることになり、自分をとりかこむ環境を把握する気持ちや自己の世界を理解するちからが徐々に高まりをみせている。

ジョイスはこの小説でスティーヴンが少しずつではあるが、徐々に大人になるための小さいが着実な一歩を歩みだしている主人公の姿が詳細に描き出されている。幼いときのスティーヴンが、周囲を徐々に理解しようとする姿が印象的である。その時点では、「ぼんやりしか理解できない (the nature of which he only dimly apprehended)」言語のひとつひとつであってもその場にとどまり、伯父や父親の難しい会話を理解するのを断念しないで、聞き取りながら自分の位置を確かめようとしている。そのようなスティーヴンの態度に彼自身の成長の兆候が潜んでいると思われる。教養小説の主人公であるスティーヴンは、言語活動への関心が高まりつつある様子を示している。ジョイスは、詩人として詩的な散文を作り上げることも有名である。あるいは小説家として、ひとつひとつの言葉を意識的に選び出して、文章の中にしゃれや音韻、言語あそびなども取り込んでいることはよく知られる。ジョイスのもうひとりの分身であるスティーヴンも苦しみながらも少しずつ成長しながら大人になる過程で、言葉を選び、言語の感覚を高めながら、言葉を書いて表現する作文の内容も一位に選ばれて、友人や大人と政治や芸術、美についての会話を徐々に展開できるようになっていく。それはすなわち自己を表現する能力、言葉をつかう能力がなにを象徴するのかと考えたときにそれはスティーヴンの成長にとって大切な自己形成の一部を示している。

7. スティーヴンの精神に対応する文体の技巧

シドニー・ボルトのジョイス論によれば、ジョイスは、読者の関心を引くような「障害要因 (obtrusive factor)」となるような文体を意識的に運用しているといわれる。^{*12} 第1章の寄宿学校グロンゴウズでの文体では、スティーヴンの気持ちを表現する言葉はこのようにあらわされる。

It made him very tired to think that way. It made him feel his head very

big. He turned over the flyleaf and looked wearily at the green round earth in the middle of the maroon clouds (17).

彼は地理の教科書を書いた住所を並べて、自分が世界の中でどこに位置するのか、確認しようとするが、「こんな風に考えているととても疲れてしまう。自分の頭がとても大きくなった気がする (It made him very tired to think that way. It made him feel his head very big)」。この構文は「くり色の雲の真ん中でみどりのまるい地球をぼんやりと眺めた (looked wearily at the green round earth in the middle of the maroon clouds)」と書くことで、文体に飾り気のない素朴さ、飾りのないことをあらわして、スティーヴンの精神が複雑な飾り気を排した素直さを表す意図が隠されている。それがスティーヴンの精神状態に対応した素直な「障害要因」による平易な表現に集約されている。主人公はこれからの成長の中で自分に待ち受ける困難に直面する運命であるが、家族の中で両親から十分に愛を受けながら素朴に大きな障害を感じることなく、順調に成長しているようすをこの言説のなかに想像することは難しくない。

さて、第2章ではパーティの帰りの鉄道馬車でエマという少女に恋するようになり、彼女に詩を作って送ろうと考えている。人を愛することを学習するようになった。女の子に好意を寄せることで、スティーヴンはそれがもどかしさを抱える葛藤につながることを意識するようになった。

A shaft of momentary anger flew through Stephen's mind at these indelicate allusions in the hearing of a stranger. For him there was nothing amusing in a girl's interest and regard. All day he had thought of nothing but their leavetaking on the steps of the tram at Harold's Cross, the stream of moody emotions it had made to course through him and the poem he had written about it (103).

スティーヴンは、怒りの矢が彼のところをつらぬく (A shaft of momentary anger flew through Stephen's mind)。知らない相手が聞いているのに下品な

言い方をするから。スティーヴンにとって少女が示す興味や好意のどこにも面白おかしいところなどない (For him there was nothing amusing in a girl's interest and regard)。ハロルド・クロスの鉄道馬車のステップでの彼女との別れ (their leavetaking on the steps of the tram at Harold's Cross)、自分の内部にあふれた重苦しい感情の流れ (the stream of moody emotions it had made to course through him)、それについて書いたあの詩 (the poem he had written about it)、一日中そんなことを考えていた。あのパーティの夜のように、スティーヴンはエマとの出会いに期待を寄せて、その場面を想像している。この文体が伝える雰囲気はスティーヴンの意識が以前よりも複雑に構造化されている文章を表している。それは、高慢な自意識を暗示するような「障害要因」を提示する。第1章で示された文体よりは、平易ではないその文章の読みにくさによって、スティーヴンが抱える精神の複雑化に注目することによって、思い通りにならない彼の抑圧された自己形成のステップが暗示される。その屈折した文体の構成が読者の主人公への重要な関心を引きつけようとしている。

最後、第5章のこの場面ではスティーヴンが友人リンチと美学と芸術について議論する。

It was that windless hour of dawn when madness wakes and strange plants open to the light and the moth flies forth silently (271).

明け方に目を覚ましたスティーヴンが美学を語ろうとするが、音楽のような霊気が朝の空気の中に立ち込める。風のない夜明けの時間 (It was that windless hour of dawn)、そのとき狂気が目をさまして (madness wakes)、怪しい植物が光に向かい花を咲かせて (strange plants open to the light)、蛾が静かに飛び立つときである。これまでに国家、言語、宗教、セクシュアリティの制度的な「障害要因」がスティーヴンを悩ませた。そうした制度から解放されたスティーヴンの精神状態がまっさらな「夜明けの風のない時間」に対応しているように読める。彼は目の前の現実的な障害に自分を直面するというよりも、彼を抑圧してきた権力から離脱して、現実から離脱しようと

して、深い思索のなかにいるかのように見える。スティーヴンはまさに観念的な芸術の探求のなかに入ろうしているところである。文体のシンプルさが、これまでの抑圧から逃亡するかのような、彼の新たな決意と熟考を示している。次の段階の主体の可能性にむけて、その主体のあり方に言説の傾向が対応しているように思われる。

主人公スティーヴンの主体の成長は、言語の形成によって媒介されていた。世界の障害に立ち向かうスティーヴンにとって、社会化をうながす言説の役割が重要な意味を持っている。その言説とは宗教、家族（父親、母親）、国家、学校という制度であり、その社会的な権威のもとで彼を強力に規定するが、同時に彼をさらに成長させる主体性の自覚を促す力をあたえてくる。本来は自由で自己が主体的で選びとるはずの芸術家の主体の上にもこうした制度的な権力が抑圧をかけるのである。それは時に自己を苦しめる主人公の性的な欲求であり、母国語を否定する国家の見えない言葉の権力に葛藤することであり、宗教指導者による厳しい戒律に立ち向かうことであった。そうした諸形式に迎合しつつ、抵抗しながら、主人公は成長とともに複雑な言葉を獲得しながら、社会的な言説の許容度を高めていく。その成長とともに自己の主体が社会から抑圧されて敗北するわけではなく、その権力の磁場のなかで、苦しみながら困難を乗り越えようと多くの活力（エネルギー）を獲得することもできた。そのエネルギーを使って主体は、さらに自己を活性化することでさらなる自己形成の展開に可能性を見出すことができるようになる。その複雑な葛藤を糧に主人公が自己形成への希望を表現している。社会化を促されたスティーヴンの言説が表象されているのが確認することができた。スティーヴンは次のように述べている。

I will tell you what I will do and what I will not do. I will not serve that in which I no longer believe, whether it call itself my home, my fatherland, or my church: and I will try to express myself in some mode of life or art as freely as I can and as wholly as I can, using for my defense the only arms(317).

スティーヴンは自分が何をしたいのか、したくないのかを話そうという。自分が信じていないものには仕えたくない。たとえそれが家族であろうと、祖国アイルランドであろうと、教会であろうと。自分がやりたいのは自分自身を表現することで、生活あるいは芸術のなにかの様式を通じて可能な限り完全に表現したいと。

註

ジェイムズ・ジョイス作品

the Project Gutenberg EBook of *A Portrait of the Artist as a Young Man*, by James Joyce

- *1 Moretti, Franco, *The Way of the World* (New York, Verso,2000), p.227.
- *2 Esty, Jed, *Unseasonable Youth*(Oxford, Oxford University Press,2012),pp.53-64.
- *3 バフテン、ミハイル『小説の言葉』伊東一郎訳、平凡社、1996年、234 – 242 頁。
- *4 Redfield, Mark, *Phantom Formation: Aesthetic Ideology and the Bildungsroman*(Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1996), p.43.
- *5 マッケイブ、コリン『ジェイムズ・ジョイスと言語革命』加藤幹郎訳、筑摩書房、1991年、8頁。
- *6 Kenner, Hugh, “Notes Toward an Anatomy of ‘Modernism,’” in Starchamber Quiry,ed. Epstain A James Joyce Centennial Volume, 1882-1982 (New York and London, Methuen, 1982), pp.24-26.
- *7 佳織、平繁『『若き日の芸術家の肖像』における音響空間』『ジョイスの迷宮』言叢社、2016年、60頁。
- *8 Berman, Jessica, *Modernist Commitment* (New York. Columbia University Press, 2011), pp.122-128.
- *9 フーコー、ミシェル『ミシェル・フーコー思考集成VI』蓮實重彦・渡辺守章監修、筑摩書房、1999年、233–235頁。
- *10 バフテン、ミハイル『小説の言葉』234 – 239 頁。
- *11 『若い芸術家の肖像』の最終章である、第5章に進むと、スティーヴン・ディーダラスが、成長を見せている様子がかがえる。ユニバーシティ・カレッジ・ダブリン (UCD) の学生である。大学生デイヴィンとの会話のなかにスティーヴンがどのような反応を示しているのか、見てみるのは無意味ではない。スティーヴンがどのような反応を示すのかを考察することで、彼にとっての成長とは何なのか、考えるヒントがあるかもしれない。そのヒントを思わせることばのやり取りを見てみよう。そもそもスティーヴンの親友であるデイヴィンはどのような人物なのか。彼は農民の出身者であり、アイルランドの民族主義を支援している。アイルランドの国語復興運動のゲール語同盟の会員でもある。

Side by side with his memory of the deeds of prowess of his uncle Mat Davin, the athlete, the young peasant worshipped the sorrowful legend of Ireland. The gossip of his fellow-students which strove to render the flat life of the college significant at any cost loved to think of him as a young fenian. His nurse had taught him Irish and shaped his rude imagination by the broken lights of Irish myth (219).

この親友デイヴィンにはスポーツ選手で伯父のマット・デイヴィンが知られているとあり、デイヴィンは若い農民であり、アイルランドの伝説を崇拝している。スティーヴンから見ると、アイルランドの伝説は「悲しい (sorrowful)」という形容詞がつけられる。うわさでは、彼は英国支配の打倒を目指すフィニアン会の会員でもあるといわれている。デイヴィンは乳母からアイルランド語を教わって、アイルランド神話の断片的な知識から荒削りの想像力を形づくったといわれる人物である。

- *12 Bolt, Sydney, *Joyce's Multiple Writing Styles in Reading on A Portrait of the Artist as a Young Man*, (San Diego, Greenhaven Press,Inc.,2000), pp. 147-152.

